

グローバル・メディア研究科

01 グローバル・メディア専攻

Global Media

第一章

第一章

仏教

国文

英米文

地理

歴史

社会

心理

経済

商

公法

私法

経営

診療放射線

名門セミナー

第四章

(1) 修士課程

● 目的

グローバル・メディア研究科修士課程は、メディアとコンテンツに関わる高度な学際的研究能力、専門的職業能力を有する人材の育成を目的とする。

これを敷衍すると、グローバル・メディア研究科は、グローバルに発展するメディアの最新動向に関する幅広い知識と実践的な英語力を有する、以下のような専門的な人材の育成を目指している。

- ① 経営・産業動向などを分析し、メディアの利活用に関し専門的な視点から提案できる人材
- ② メディアとコミュニケーションの社会的・文化的な影響に関する専門的な知識を有する人材
- ③ メディア分野の新しいサービスに関する専門的な知識を有する人材

● 学位授与の方針

本研究科の目指すグローバル・メディア教育は、社会科学系・工学系の学問領域を専門とする人材を対象として、学際的なアプローチで、幅広くメディアとコンテンツの本質を理解し、グローバル社会に貢献できる「学際的な能力」に加えて「学際領域の中での特定分野における専門知識」を深めた人材の養成を目指すものである。

この目的を踏まえ、グローバルに発展するメディアの最新動向に関する幅広い知識と実践的な英語力を有し、以下の3つの能力・知識、いずれかを身につけた者に対して、「修士（メディア学）」の学位を授与する。

- ① 経営・産業動向などを分析し、メディアの利活用に関し専門的な視点から提案できる能力
- ② メディアとコミュニケーションの社会的・文化的な影響に関する専門的な知識
- ③ メディア分野の新しいサービスに関する専門的な知識

以上を確認するため、下記の条件全てを満たしたものに対して、「修士（メディア学）」の学位を授与する。

1. 本研究科に2年以上在籍すること。
2. 基礎科目から所定の必修科目4単位、リサーチイングリッシュ（ライティング）、リサーチイングリッシュ（プレゼンテーション）2科目のうち2単位以上、展開科目から16単位以上、研究指導科目1分野8単位を含む合計30単位以上を修得すること。但し、展開科目は各分野から2単位以上を修得すること。
3. 修士論文の審査及び試験に合格すること。

● 教育課程の編成・実施方針

本研究科の教育課程の目的は、メディアとコンテンツの利活用とメディアに係わる新しいサービスの提供に資する人材の養成である。本研究科の教育の特色のひとつは、以下の通り、経営・産業面でのメディアの利活用、メディアとコミュニケーションの社会的・文化的影響、及びメディア自体のイノベーションを志向する3つの側面を設けることである。

- ① 「経営・産業のメディアの利活用」の側面を志向する際は、グローバル化の進展する次世代において産業界等のビジネス・セクター、公共団体等の非営利セクター、そして地域社会等、社会全体がメディアとコンテンツの創造的活用によって革新を推進するための方策を考究する。産業論に基づくマクロ分析的アプローチと、経営学に基づくミクロ分析的アプローチを軸とした豊富な事例研究に根差す高度な実践教育を志向する。また、企業等の経営管理の分析については、組織における経営管理の経験を持つ教員を配置し実践面を強化する。
- ② 「メディアとコミュニケーションの社会的・文化的影響」の側面では、企業、政府、NPO等が国内志向から脱却しグローバルな展開を志向する際に不可欠な異文化システム理解能力を高める教育研究も推し進める。また、社会科学的な素養に裏打ちされたコンテンツの制作管理についても海外において映像コンテンツ制作の経験を有する教員を配置し、リアリティに富む授業を展開する。
- ③ 「メディア自体のイノベーション」の側面からは、次世代の革新的メディアとコンテンツの制作等に関わる原理、方法と実践を考究する。この分野にも実務経験者を配置する。例えば、デジタルネットワークの開発に携わり各種ビジネスを展開した経験のあるメディア情報論系の教員を配置し、実践面を強化する。

以上3つの側面のいずれかに強い関心を持つ学生のために、研究指導科目である演習で、2年間にわたって徹底して理論と実践両面の能力を涵養する。同時に、学際的共通分野として、基礎科目を配置するとともに、多彩な専門領域科目群を展開科目として提供し、学際性と専門性を担保するよう配慮する。

即ち、基礎科目としては、学際的共通分野として、グローバル・メディア研究特論とグローバル・メディア研究方法特論を本研究科の1年次学生全員に対する必修科目に設定し、初年次の「基礎科目」としての役割を持たせるとともに学際的研究への適応性を高める。更に、本研究科独自の試みのひとつとして、実践的英語科目であるリサーチイングリッシュ（ライティング、プレゼンテーション）を選択必修科目として設け、学生がグローバルに活動するための資質を涵養する。

次に、1年次の前期・後期、2年次の前期・後期の合計8単位の演習科目は、本研究科の「研究指導科目」として重要視するものである。専門性を追求しながらも狭量な思考に陥らないようにとの意図から複数の教員によるグループ指導体制をとる。本研究科の教育目標に合わせてメディア産業論分野と、メディア文化論分野、及びメディア情報論分野の3つの演習を設ける。

さらに、広範な専門分野の科目群を「展開科目」として位置付け、学生の専門研究への欲求にこたえる。すなわち、本研究科の主たる研究分野である社会科学系の教員がメディア産業論・文化論分野の科目を担当し、情報科学系の教員がメディア情報論分野の科目を担当する。学生は各自の研究テーマに照らして選択履修することになるが、より幅広く学修するよう指導する。このことにより学際的な資質に加え、研究上必要な専門的能力を涵養する。

● 修了の要件

修士課程に2年以上在学して、次の表に従って30単位以上修得し、かつ修士論文の審査および最終試験に合格しなければならない。

基礎科目	・グローバル・メディア研究特論 ・グローバル・メディア研究方法特論	4単位
	・リサーチイングリッシュ（ライティング） ・リサーチイングリッシュ（プレゼンテーション）	2単位以上
展開科目	・産業論分野 ・文化論分野 ・情報論分野	各分野から2単位以上を含む 16単位以上
研究指導科目	・産業論分野 ・文化論分野 ・情報論分野	1分野8単位
合計		30単位以上

● 学位論文の審査基準

修士課程2年間の成果としてまとめる修士論文は、原則として60,000字以上とする。

修士論文の審査にあたっては、主査1名のほか副査2名を置く。副査2名のうち1名は当該分野以外の分野（例えば主査がメディア産業論の教員であれば、メディア文化論またはメディア情報論分野）から選出する。なお、この1名については、専門分野等の関係が必要が生じた場合は学外の専門家から選出する。

審査については、透明性を確保するために、1月に修士論文公聴会を実施する。そのうえで、更に2月に上記3名の審査委員による最終試験を実施する。上記の3名の審査員は提出された論文を慎重に審査したうえで、提出者に対し口頭試問形式での試験を行う。成績の評価にあたっては、論文の内容および試験結果に基づき、3名による厳正なる審議を経るものとする。更に、審査結果は、研究科委員会において報告し、全教員の投票によって可否を決定する。なお、論文評価の基準は以下の通りである。

- ① 問題の所在が明確に示されているか。問題設定は適切であるか。（テーマの妥当性・適確性）
- ② 先行研究の検討は十分になされているか。修士論文との関連性は妥当か。（既存成果との関連妥当性）
- ③ 仮説等の設定は適確か。データの収集の方法は適格で信頼がおけるか。（方法論上の適確性、データの信頼性）
- ④ 叙述は論理的かつ緻密になされているか。論文としての形式に適合しているか。（叙述の適確性）
- ⑤ 学位論文として創意工夫があるか。独創性があるか。（独創性）

修士論文の評価は論文の内容と口頭試問の結果を合わせて、「S」「A」「B」「C」「F」で行う。

● グループ指導制

- ① 研究指導科目は、産業論、文化論、および情報論の分野ごとに、複数の教員によるグループ指導制をとる。
- ② 1年次終了時までに修士論文のテーマを設定する。その後は、複数の教員からのアドバイスを受けながら、専門分野の最も近い教員が、修士論文の作成を指導する。

● 履修上の注意

- ① 履修科目の選択に当たっては、各分野の指導教員の指導を受け、研究テーマに関連の深い科目を網羅すること。
- ② 各分野の指導教員が必要と認めた場合には、大学院の正規講義科目以外に学部で開講している関連基礎科目の特別履修を課すことがある。ただし、関連基礎科目の単位認定はしない。

● 開講科目

科目区分	授業科目	学習方法	単位数		開講期間	担当者	備考	
			必修	選択				
基礎科目	グローバル・メディア研究特論	講義	2		前期	専任 ◎川崎賢一	オムニバス(石川,各務,山口,絹川,テヅカ,服部,吉田,朴,石橋,高,西岡,松前)	
	グローバル・メディア研究方法特論	講義	2		後期	専任 ◎川崎賢一	オムニバス(石川,各務)	
	リサーチイングリッシュ(ライティング)	講義		2	前期	専任・Ph.D (Applied Linguistics) アシュウェル ティム		
	リサーチイングリッシュ(プレゼンテーション)	講義		2	後期	専任 杉森建太郎		
展開科目	産業論分野	グローバル・メディア産業論	講義		2	後期	専任・博(政策・メディア) 西岡洋子	
		グローバル・マネジメント論	講義		2	前期	専任・博(学術) 各務洋子	
		メディア・ファイナンス論	講義		2	後期	専任・博(営) 山口浩	
		グローバル・マーケティング論	講義		2	前期	専任・博(商) 朴正洙	
		グローバル・産業経済論	講義		2	後期	専任・Ph.D (Economics) 絹川真哉	
		情報法研究	講義		2	前期	専任 松前恵環	
	文化論分野	グローバル文化論	講義		2	前期	専任 川崎賢一	
		グローバル映像文化論	講義		2	後期	専任・Ph.D (Media and Communication Studies) テヅカヨシハル	
		グローバル・メディア社会史	講義		2	後期	専任・博(社会情報) 高媛	
		グローバル・リレーションズ論	講義		2	前期	専任・博(学術) 芝崎厚士	
	情報論分野	モバイル・ユビキタス・コンピューティング論	講義		2	後期	専任・博(情報) 石川憲洋	
		次世代メディア・コンテンツ構成法	講義		2	前期	専任・博(工) 吉田尚史	
		グローバル情報イノベーション論	講義		2	前期	専任・博(政策・メディア) 石橋直樹	
グローバル・デジタルネットワーク論		講義		2	後期	専任・博(学術) 服部哲		

第一章
第一章
仏教
国文
英米文
地理
歴史
社会
心理
経済
商
公法
私法
経営
診療放射線
グローバルメディア
第四章

研究指導科目	産業論分野	グローバル・メディア産業特別研究Ⅰ-1	演習		2	前期	専任・博(営) 専任・博(学術) 専任・Ph.D (Economics)	◎山 口 浩 各 務 洋 子	※は前期のみ担当
		グローバル・メディア産業特別研究Ⅰ-2	演習		2	後期	専任・博(商) 専任・博(政策・メディア)	◎川 崎 賢 一 芝 崎 厚 士	
		グローバル・メディア産業特別研究Ⅱ-1	演習		2	前期	専任・博(情報) 専任・博(学術) 専任・博(工)	◎石 川 憲 洋 服 部 哲 尚	
		グローバル・メディア産業特別研究Ⅱ-2	演習		2	後期	専任・博(情報) 専任・博(学術) 専任・博(工)	◎石 川 憲 洋 服 部 哲 尚	
	文化論分野	グローバル・メディア文化特別研究Ⅰ-1	演習		2	前期	専任・博(社会情報) 専任・博(コミュニケーション学)	◎高 橋 直 樹 阿 部 康 人	
		グローバル・メディア文化特別研究Ⅰ-2	演習		2	後期	◎高 橋 直 樹 阿 部 康 人		
		グローバル・メディア文化特別研究Ⅱ-1	演習		2	前期	◎高 橋 直 樹 阿 部 康 人		
		グローバル・メディア文化特別研究Ⅱ-2	演習		2	後期	◎高 橋 直 樹 阿 部 康 人		
	情報論分野	グローバル・メディア情報特別研究Ⅰ-1	演習		2	前期	◎高 橋 直 樹 阿 部 康 人		
		グローバル・メディア情報特別研究Ⅰ-2	演習		2	後期	◎高 橋 直 樹 阿 部 康 人		
		グローバル・メディア情報特別研究Ⅱ-1	演習		2	前期	◎高 橋 直 樹 阿 部 康 人		
		グローバル・メディア情報特別研究Ⅱ-2	演習		2	後期	◎高 橋 直 樹 阿 部 康 人		

注：◎印は主担当

● 授業科目の概要

■ グローバル・メディア研究特論【講義】

川崎 賢一/石川 憲洋/各務 洋子/山口 浩/絹川 真哉/テヅカ ヨシハル/服部 哲/吉田 尚史/朴 正洙/
石橋 直樹/高 媛/西岡 洋子/松前 恵環 (オムニバス)

通信・放送融合時代のフレームワークを前提とするメディアのイノベーションならびにメディアによる社会組織の全体的イノベーションの実現に向けて、これらの学術領域において現に存在する課題および今後顕在化する可能性のある課題について考察し、修士課程における研究テーマの発見・選択に役立てる。

■ グローバル・メディア研究方法特論【講義】

川崎 賢一/石川 憲洋/各務 洋子 (オムニバス)

本講義では、産業論やメディア文化を学ぶ者はもちろん、情報メディアを研究する者にとっても必要な社会科学的な調査方法について3つの領域から概説する。すなわち、①社会科学研究のデザイン(概念形成など)、②定量的調査法、③定性的調査法、を概説し、社会調査法の観点から、②経営学の観点から、③IT技術概論の領域、の3つを柱としている。

■ リサーチイングリッシュ(ライティング)【講義】

アシュウェル ティム

本期は、大学院での研究活動において必要とされる英語のリーディングやライティングスキルを学生に身につけさせることを目的とした授業を行う。グローバル化が一層進む中、国際語として世界中で使用されている英語を使用してリーディングやライティングスキルを身につけることは、大学院生としての研究活動のみならず、今後履修者が社会人として多方面で活躍の場を広げていくにあたり必須であるといえる。具体的には特にライティングスキルの習得に重点をおきつつ、最終的に履修学生が以下の3つの目標を達成することを目指す：(1)英語の参考文献を検索したり選択したりすることができるようになる。(2)英語の参考文献を読み、評価することができるようになる。(3)自身の英語論文の中で、英語の参考文献を要約したり引用したりすることができるようになる。

■ リサーチイングリッシュ（プレゼンテーション）【講義】

杉森 建太郎

国際共通語として使用されている英語でプレゼンテーションを行うスキルを身につけることは、大学院生としての研究活動のみならず、今後履修者が社会人として多方面で活躍の場を広げていくにあたり必須であるといえる。同観点から本授業においては、英語のプレゼンテーションスキルを履修者に身につけさせることを目的とした、実践的な授業を行う。具体的には履修者は、まず英語のプレゼンテーションの行い方やプレゼンにおいて頻繁に使用されるキーワードについて学んだ後、自身の研究に関する英文プレゼンテーション資料を作成し、実際に同資料を用いてプレゼンテーションを行う。

■ グローバル・メディア産業論【講義】

西岡 洋子

メディア産業のコンテンツ、ネットワークサービス、物理的なネットワークの3つのレイヤーのうち、下位2レイヤーを対象として、インターネットのブロードバンド化、スマートフォンの普及による携帯電話サービスとインターネットとの一体化とグローバル化などの構造変化を、文献研究、産業データ分析などを通じて学修する。同時に、産業組織論の手法に基づいて、こうした構造変化が伝統的なメディア産業に与える影響と課題を抽出するとともに、情報通信政策の方向性を考察する。

■ グローバル・マネジメント論【講義】

各務 洋子

グローバル化とメディア技術の革新により、企業の存続・成長には絶えざる革新を生み続けるための組織作り、人づくり、プロセス作りといったマネジメント力が益々求められている。グローバル社会で永続する企業の条件、独創性を育む仕組みの構築、生き残り成長を続けるためにメディアを駆使したグローバル組織の戦略を分析する。変化を続ける企業の外部環境分析・人材、マネジメントに係る内部環境分析、ケーススタディによる個別企業分析等を通して、グローバル社会で永続を可能とする企業の在り方を考察する。

■ メディア・ファイナンス論【講義】

山口 浩

メディア及びコンテンツビジネスにおけるファイナンスの現状と、企業通貨や仮想経済圏等、技術や社会の変化に対応した新たなビジネスモデルを理論とデータ、ケースや実習を通じて学ぶとともに、実際に事業計画を作りながらそれらが企業経営上持つ意義などについて考察する。

■ グローバル・マーケティング論【講義】

朴 正洙

グローバル・マーケティングとは国境を越えて遂行されるマーケティング諸活動である。グローバル競争市場のなかで、企業は存続のために経営資源の優位性をグローバル・ベースで積極的に獲得しながら、本国とは異なる消費者にニーズに対処していく必要性もある。本講義では、グローバル・マーケティングに関する理論ならびに実態について、既存研究の考察および分析を通して理解を深めることを目的とする。

■ グローバル・産業経済論【講義】

絹川 真哉

本講義では、グローバルに拡大する市場と企業行動の原理をミクロ経済学の基礎を学ぶことによって理解し、さらに、グローバル企業の「ケーススタディ」を読むことで、企業戦略の実際および産業動向について学ぶ。

■ 情報法研究【講義】

松前 恵環

情報社会において生じている様々な法的問題を題材に、情報法に関する研究を行う。具体的には、「表現の自由」、「名誉毀損」、「プライバシー」、「肖像権」、「情報公開」、「個人情報保護」、「著作権法」、「違法・有害情報」、「情報媒介者の責任」、「サイバー犯罪」等、情報法の主要なテーマに関する基本的な文献の講読、及び、実際に社会で問題となっている具体的な事例に関する調査・発表・議論等を通じて、理解を深める。

■ グローバル文化論【講義】

川崎 賢一

最初に、グローバリゼーション特に文化的グローバリゼーションの近年の動向を押え、その特色を明らかにする。次に、広範にわたる影響の内、新しい社会秩序や経済に強く関係する側面について説明する。具体的には、アートカルチャーと文化産業・コンテンツ産業への影響を取り上げる。最後に、それらに伴う極めて厳しいグローバルな競争と協力関係の変容を、アメリカ・ヨーロッパ・東アジア・東南アジア等の現状を紹介しつつ、日本の現実と今後の戦略的方向性などについて考察する。

■ グローバル映像文化論【講義】

テヅカ ヨシハル

映像は何を伝えるのか、あるいは伝ええないのか本講義では社会学メディア文化研究の視座から「意味の構築」と「権力」に関する理論を概説したのち、国境を超えたメディアテキストの流通がどのように国民文化を変容させつつあるのか、その諸相を概説する。日本における第2次世界大戦後から現在までの国境を越えた映画製作の実践をたどり、20世紀後半の経済のグローバル化が日本の国民文化とアイデンティティに及ぼした変容のありさまを示す。現在進行中の映像産業の越国境化、アジア地域化におけるコスモポリタニズムの可能性について議論する。

■ グローバル・メディア社会史【講義】

高 媛

本講義では、日清戦争から現在までの東アジアの観光史を手がかりに、満洲や台湾、沖縄などの事例をふまえながら、観光地の開発過程や観光イメージの形成過程における権力とメディアの関係性を、歴史社会学の視点から考察する。加えて、戦争・植民地遺跡の観光に着目し、国家からグローバルなメディア資本に至る多様な主体の役割を明らかにし、国境を超える記憶の摩擦や葛藤のありようについて解説する。

■ グローバル・リレーションズ論【講義】

芝崎 厚士

単なる国家間関係を含む、地球規模の国境を越えた様々な主体間の関係として「グローバル・リレーションズ」を総体としてとらえるための歴史的背景、理論的概念枠組を習得した上で現実の世界の諸課題への取り組みを考究する。関連する文献の輪読とプレゼンテーション、ディスカッションを組み合わせた授業を行う。

■ モバイル・ユビキタス・コンピューティング論【講義】

石川 憲洋

本講義では、インターネットの発展とその情報メディアとしての特徴について述べた後、携帯電話によるモバイルインターネットの発展とその社会的影響について述べる。次に、インターネット、携帯電話を支える基盤技術について述べた後、人と人を繋ぐソーシャルネットワーク、物と物を繋ぐユビキタスネットワークの発展、次世代の情報メディアの展望について、事例を含めて実践的、学際的な観点から講義を行う。

■ 次世代メディア・コンテンツ構成法【講義】

吉田 尚史

多様化する次世代情報メディアを活用し、グローバル情報データベースの手法を応用して情報発信を行うために必要な、コンテンツ構成の方法論について述べる。具体的には、次世代の多様な情報メディアの性質、グローバル情報データベースの原理、コンテンツ構成方法について、実習を伴う実践的な講義を行う。さらに、次世代情報メディア及び作成したコンテンツを活用して、プレゼンテーション能力や情報発信能力の向上も図る。

■ グローバル情報イノベーション論【講義】

石橋 直樹

本講義は、特に情報技術を対象とし、1) Motivation, 2) Design&Implementation, 3) Influenceという視点から、実際に運用されている既存の情報サービスを評価・分析することで、技術が産まれ社会で利用されていく過程について概説する。さらに、高度なWebコンテンツなどのプログラミング実習を行なうことで、特にインターネットを前提としたシステム開発の手法を学ぶ。これらを通じて、社会の要求に応じた情報システムのイノベーションを実現するために必要な技術・ノウハウの獲得を目指す。

■ グローバル・デジタルネットワーク論【講義】

服部 哲

自由に情報を発信し共有できる情報基盤として発展を遂げたインターネットの技術的特性、運用原理を理解した後、社会に与えたインパクトや課題を、いくつかの事例を取り上げ、ケーススタディを行う。さらに、グローバルな社会で、情報メディアを共通インフラとして持った場合に、どのようなルールが必要で、どのようなガバナンスを整え、そして維持していくのか、実運用を想定したシステム設計やアプリケーション開発を行うことによって理解を深める。

■ グローバル・メディア産業特別研究Ⅰ-1【演習】

山口 浩／各務 洋子／絹川 真哉／朴 正洙／西岡 洋子／星野 真／松前 恵環

グーグルなどの広告モデルによる検索エンジン、スマートフォンの普及とアプリ市場の発展、SNSの普及とビジネス利用などの新しいメディア産業の新しい動向と、それが既存のメディア産業に与える影響、および企業経営にとっての重要性を把握するために、先行研究の輪読や実証的分析の指導を行う。

■ グローバル・メディア産業特別研究Ⅰ-2【演習】

山口 浩／各務 洋子／絹川 真哉／西岡 洋子／星野 真／松前 恵環

検索エンジン、スマートフォン、およびSNSなどのメディアの創造的活用によって、メディア産業とメディアに依拠した各種産業、及び企業経営を革新するための原理、方法と実践をグローバルな視点に立って考究し、テーマの設定、研究手法など修士論文の執筆に向けての指導を行う。

■ グローバル・メディア産業特別研究Ⅱ-1【演習】

山口 浩／各務 洋子／絹川 真哉／朴 正洙／西岡 洋子／星野 真／松前 恵環

グローバル・メディア産業特別研究Ⅰの成果の上に、各学生が個別に研究テーマを設定し、最も専門分野の近い教員の指導のもとで修士論文の素案作成の指導を行う。なお、個別の研究テーマについて、幅広い視点からの検討を重視し、当演習を履修する学生全員と担当教員全員の参加による発表とディスカッションを通じて研究内容を深めるとともに、各教員の研究分野からのアドバイスと指導を行い、個別の研究内容の質的な向上を図る。

■ グローバル・メディア産業特別研究Ⅱ-2【演習】

山口 浩／各務 洋子／絹川 真哉／西岡 洋子／星野 真／松前 恵環

前期の成果の上に、修士論文の完成に向けての指導を行う。前期同様に、当演習を履修する学生全員と担当教員全員の参加による発表とディスカッションを通じて研究内容を深めるとともに、各教員の研究分野からのアドバイスと指導を行い、修士論文の内容の充実を図る。

■ グローバル・メディア文化特別研究 I-1 【演習】

川崎 賢一／芝崎 厚士／テツカ ヨシハル／高 媛／阿部 康人

日本発のイノベーションが国内市場志向から脱却しグローバルな展開を志向する際に必要不可欠な文化システム理解能力を高める教育研究を行う。そのために社会学、文化研究、国際関係論・グローバル関係論やコミュニケーション論関連の古典ならびに最新の研究論文を輪読するとともに、実証的研究の方法を指導する。今期は主として事例研究を行う。

■ グローバル・メディア文化特別研究 I-2 【演習】

川崎 賢一／芝崎 厚士／テツカ ヨシハル／高 媛／阿部 康人

グローバル化と文化の問題について受講者各自の研究関心を問題意識に高め、テーマの設定、研究手法など修士論文執筆の準備へ向けた指導をする。

■ グローバル・メディア文化特別研究 II-1 【演習】

川崎 賢一／芝崎 厚士／テツカ ヨシハル／高 媛／阿部 康人

受講者各自が設定したテーマにしたがい、最も専門分野の近い教員のもとで修士論文の作成にあたる。受講者各自の研究テーマについて、幅広い視点からの検討を重視し、当演習を履修する学生全員と担当教員全員の参加による発表とディスカッションを通じて研究内容を深めるとともに、各教員の研究分野からのアドバイスと指導を行い、個別の研究内容の質的な向上を図る。

■ グローバル・メディア文化特別研究 II-2 【演習】

川崎 賢一／芝崎 厚士／テツカ ヨシハル／高 媛／阿部 康人

前期における成果の上に、修士論文の完成に向けての指導を行う。前期同様に、当演習を履修する学生全員と担当教員全員の参加による発表とディスカッションを通じて研究内容を深めるとともに、各教員の研究分野からのアドバイスと指導を行い、修士論文の内容の充実を図る。

■ グローバル・メディア情報特別研究 I-1 【演習】

石川 憲洋／服部 哲／吉田 尚史／石橋 直樹／平井 辰典

実社会における学際的な課題に対して、デバイス、ネットワーク、クラウド、ソーシャルメディアなどを含む次世代の情報システム全般を対象として、どのようなメディアのイノベーションが解決につながるのか、実践的に探求する。そのため、試行錯誤によるフィードバックを元にした段階的、実践的アプローチを用いて研究を進める。最初に文献等によるネットワーク、クラウドなどに関する調査を行い、研究を進めるために必要な知識、技術の習得を進める。その上で、実践的な研究課題を明らかにして、研究テーマを設定する。

■ グローバル・メディア情報特別研究 I-2 【演習】

石川 憲洋／服部 哲／吉田 尚史／石橋 直樹／平井 辰典

グローバル・メディア情報特別研究 I-1 の成果に基づいて、担当教員の指導のもとに、プロトタイプ作成などの実践的な手法により、設定したテーマに関する研究を進める。限られた時間とリソースで効率よく研究を進めるために、ラーニングポートフォリオを用いた研究計画とその管理方法を身に付ける。研究の中間成果をとりまとめ、論文として国内の学会等で発表することにより、高度な文章力、プレゼンテーション能力の向上を図り、修士論文執筆の準備を行う。

■ グローバル・メディア情報特別研究 II-1 【演習】

石川 憲洋／服部 哲／吉田 尚史／石橋 直樹／平井 辰典

1 年次のグローバル・メディア情報特別研究 I の成果に基づいて、修士論文のテーマを定める。修士論文執筆に向け、そのために必要なより高度な研究を行う。具体的には、設定した研究課題の解決に向けた具体的な手法の考案、その検証のためのプロトタイプ作成とその評価などを行う。前期においては、個別のテーマについて、幅広い視点からの検討を重視し、担当教員全員の参加による発表とディスカッションを通じて研究内容を深めるとともに、各教員の研究分野からのアドバイスと指導を行い、個別の研究内容の質的な向上を図る。

■ グローバル・メディア情報特別研究Ⅱ-2【演習】

石川 憲洋／服部 哲／吉田 尚史／石橋 直樹／平井 辰典

グローバル・メディア情報特別研究Ⅱ-1の成果に基づき、教員（修士論文指導教授）のもとで、修士論文の執筆を行い、修士論文を完成させる。修士論文の執筆指導は主に指導教授が行うが、研究内容の質を高め、修士論文レベルの研究を完成させるために、他の担当教員もそれぞれの専門分野の研究者の観点からより高度な研究指導を行う。加えて、修士論文の研究成果をとりまとめ、論文として国際会議で発表することにより、実践的な英語力、英語によるプレゼンテーション能力の向上を図る。

第一章

第二章

仏教

国文

英米文

地理

歴史

社会

心理

経済

商

公法

私法

経営

診療放射線

グローバルメディア

第四章

(2) 博士後期課程

● 目的

グローバル・メディア専攻博士後期課程では、グローバルな規模で発展するメディアの最新動向に関する高度な専門的研究能力を有する職業人及び研究者を育成することを目的とする。

これを敷衍すると、グローバル・メディア研究科博士後期課程では、社会科学系・工学系の学問領域を専門とする人材を対象として、メディアに関する学際的な専門知識の上に立った高度な専門的研究・開発能力を有する職業人の育成を目指している。

即ち、グローバルに展開されるメディアの利活用に関する複合的な問題解決について、メディア産業、メディア文化、メディア情報の3つの視点から学際領域上で問題解決的・実践的な教育を行うことによって、新しい研究分野や方法論を開拓し、グローバルな経済社会の諸分野で指導的な役割を果たすことのできる専門家の育成を図る。

具体的には、以下のような人材の養成を目指す。

- ①社会的・文化的影響と情報技術の動向を理解した上で、経営・産業動向などを分析し、メディアの利活用に関して、グローバルな視点にも立って提案できる人材
- ②企業・団体におけるICTの利活用状況と情報技術の動向を理解した上で、グローバルな視点にも立ってメディアとコミュニケーションの社会的・文化的な影響を分析する能力を有する人材
- ③経営・産業動向と各種サービスの社会的・文化的影響を理解し、グローバルな視点にも立って、メディア分野の新しいサービスを開発する能力を有する人材

● 学位授与の方針

グローバル・メディア研究科博士後期課程は、社会科学系・工学系の学問領域を専門とする人材を対象として、メディアに関する学際的な専門知識の上に立った高度な専門的研究・開発能力を有する職業人の育成を目指すものである。この目的を踏まえ、以下の3つの能力のいずれかを身に付けた者に対して、博士（メディア学）の学位を付与する。

- ①社会的・文化的影響と情報技術の動向を理解した上で、経営・産業動向などを分析し、メディアの利活用に関して、グローバルな視点にも立って提案できる能力
- ②企業・団体におけるICTの利活用状況と情報技術の動向を理解した上で、グローバルな視点にも立ってメディアとコミュニケーションの社会的・文化的な影響を分析する能力
- ③経営・産業動向と各種サービスの社会的・文化的影響を理解し、グローバルな視点にも立って、メディア分野の新しいサービスを開発する能力

以上を確認するため、下記の条件全てを満たしたものに対して、「博士（メディア学）」の学位を授与する。

1. 博士後期課程に3年以上在籍すること。
2. 講義科目を各分野から2単位以上を含む6単位以上、研究指導科目を1分野12単位、計18単位以上を修得すること。
3. 必要な研究指導を受けた上、博士論文を提出してその審査及び最終試験に合格すること。

● 教育課程の編成・実施方針

博士後期課程でも理論と実践両面の能力を涵養するためのカリキュラムを編成している。本課程の特色は、経営・産業面でのメディアの利活用、メディアとコミュニケーションの社会的・文化的影響、及びメディア分野の新しいサービスを志向する3つの側面を選択科目として設けた上で、研究指導科目を単位化し、博士論文の完成に導く点である。

第一の、「経営・産業面でのメディアの利活用」の側面は、グローバル化の進展する次世代において、産業界等のビジネス・セクター、公共団体等の非営利セクター、そして地域社会等、社会全体がメディアとコンテンツの創造的活用によって革新を推進するための方策を考究することである。この側面の教育のために、メディア産業論分野として選択科目を設ける。メディア産業論に基づくマクロ分析的アプローチと、経営学に基づくミクロ分析的アプローチを軸とした豊富な事例研究に根差す高度な実践教育を志向する。また、企業等の経営管理の分析については、組織における経営管理の経験を持つ教員を配置し実践面を強化する。

第二の、「メディアとコミュニケーションの社会的・文化的影響」の側面では、企業、政府、NPO等が国内志向から脱却し、グローバルな展開を志向する際に不可欠な異文化理解能力を高める教育研究も推し進める。この側面を教育するために、メディア文化論分野として選択科目を設ける。グローバルとローカルのそれぞれの文化論、グローバルとローカルの関係、国際関係についても博士論文執筆に深い示唆を与える教育を行う。

第三の、「メディア分野の新しいサービス」の側面からは、次世代の革新的メディアとコンテンツの制作等に関わる原理、方法と実践を研究する。この側面の教育を目的として、メディア情報論分野として選択科目を設ける。この分野にも実務経験者を配置する。例えば、ネットワークの開発に携わり各種ビジネスを展開した経験のあるメディア情報論分野の教員を配置し、実践面を強化する。

以上3つの側面のいずれかに強い関心を持つ学生のために、研究指導科目によって、3年間にわたって徹底して理論と実践両面の能力を涵養するとともに、多彩な専門領域科目群を選択科目として提供し、学際性と専門性を担保するよう配慮する。研究指導科目として3分野の中から1分野を選択させ、12単位を必修科目として履修させる。また、その指導については、3分野毎に複数の教員によるグループ指導により、きめ細かな指導を徹底する。さらに、社会人の方も仕事と本研究科における学修を両立できるように、授業支援システムを利用して、教材・文献の提示、課題の指示と提出、質問とその回答の提示等を行うことにより、学生、特に社会

人が自宅・勤務先等からも学修できる環境を整備している。このように充実したカリキュラムに基づいて、多様な実務経験と海外経験に富んだ教員が教育に当たる。

設備の面では、進化するメディアに対応できるように、良好なインターネットアクセス環境を整備し、院生一人ひとりにパソコンを割り当てるとともに、共同作業用のワークショップルーム、コンテンツスタジオを設けている。

● 修了の要件

博士後期課程に3年以上在学し、かつ、所定の科目について18単位以上修得し、必要な研究指導を受けたうえで、博士論文を提出してその審査及び最終試験に合格しなければならない。

講義科目	・産業論分野 ・文化論分野 ・情報論分野	各分野から2単位以上を含む 6単位以上
研究指導科目	・産業論分野 ・文化論分野 ・情報論分野	1分野12単位
合計		18単位以上

● 学位論文の審査基準

本課程3年間の成果を纏める博士論文は、原則として60,000字以上とする。博士論文の審査にあたっては、主査1名のほか副査4名を置く。主査は原則として研究指導科目を担当した教員とする。学際性を担保するために、副査4名のうち2名は当該分野以外の2分野（例えば主査がメディア産業論分野の教員であれば、メディア文化論分野およびメディア情報論分野）から選出する。なお、この2名については、専門分野等の関係で必要が生じた場合は学内（研究科外）・学外の専門家から選出する。これらの専門家は、審査対象の博士論文の研究領域を主査が精査し、学外のグローバルなメディア研究をしている人材を副査に選出する。グローバル性を担保するために、博士論文執筆にあたっては、国際学会で1件以上の論文を発表していることを前提とする。審査にあたっては、透明性を確保するために、公聴会を実施する。そのうえで、さらに上記5名の審査委員による最終試験を実施する。上記の5名の審査員は提出された論文を慎重に審査したうえで、提出者に対し口頭試問形式での試験を行う。成績の評価にあたっては、論文の内容及び試験結果に基づき、5名による厳正なる審議を経るものとする。さらに、審査結果は、研究科委員会において報告し、全教員の投票によって合否を決定する。なお、論文評価の基準は以下の通りである。

- ①問題の所在が明確に示されているか。
- ②問題設定は適切であるか。（テーマの妥当性・適確性）
- ③先行研究の検討は十分になされているか。博士論文との関連性は妥当か。（既存成果との関連妥当性）
- ④仮説等の設定は適確か。データの収集の方法は適確で信頼がおけるか。（方法論上の適確性、データの信頼性）
- ⑤叙述は論理的かつ緻密になされているか。論文としての形式に適合しているか。（叙述の適確性）
- ⑥学位論文として創意工夫があるか。独創性があるか。（独創性）
- ⑦グローバル性・学際性が確保されているか。
- ⑧高度専門職業人として理論と実践の相互関係に配慮されているか。

博士論文の評価は論文の内容と口頭試問の結果を合わせて行う。

● 履修上の注意

履修科目の選択にあたっては、指導教員の指導を受け、研究分野に関連の深い科目を履修すること。

● 開講科目

	授業科目	学習方法	単位数	開講期間	担当者	備考
講義科目	産業論分野 グローバル・マネジメント論特殊研究	講義	2	前期	専任・博（学術） 各務洋子	
	産業論分野 グローバル・メディア制度論特殊研究	講義	2	後期	専任・博（政策・メディア） 西岡洋子	
	産業論分野 メディア・ファイナンス論特殊研究	講義	2	後期	専任・博（営） 山口浩	
	文化論分野 グローバル文化論特殊研究	講義	2	前期	専任 川崎賢一	
	文化論分野 グローバル・リレーションズ論特殊研究	講義	2	後期	専任・博（学術） 芝崎厚士	
	情報論分野 モバイル・ユビキタス・コンピューティング論特殊研究	講義	2	後期	専任・博（情報） 石川憲洋	
情報論分野 次世代メディア・コンテンツ構成法特殊研究	講義	2	前期	専任・博（工学） 吉田尚史		

研究 指導 科目	産業論分野	グローバル・メディア産業研究指導Ⅰ	研究 指導	2	前期	専任・博 (学術) 専任・博 (政策・メディア) 専任・博 (経営学)	◎各 西山	務 岡 口	洋 洋	子 子 浩		
		グローバル・メディア産業研究指導Ⅱ	研究 指導	2	後期	専任・博 (学術) 専任・博 (政策・メディア) 専任・博 (経営学)	◎各 西山	務 岡 口	洋 洋	子 子 浩		
		グローバル・メディア産業研究指導Ⅲ	研究 指導	2	前期	専任・博 (学術) 専任・博 (政策・メディア) 専任・博 (経営学)	◎各 西山	務 岡 口	洋 洋	子 子 浩		
		グローバル・メディア産業研究指導Ⅳ	研究 指導	2	後期	専任・博 (学術) 専任・博 (政策・メディア) 専任・博 (経営学)	◎各 西山	務 岡 口	洋 洋	子 子 浩		
		グローバル・メディア産業研究指導Ⅴ	研究 指導	2	前期	専任・博 (学術) 専任・博 (政策・メディア) 専任・博 (経営学)	◎各 西山	務 岡 口	洋 洋	子 子 浩		
		グローバル・メディア産業研究指導Ⅵ	研究 指導	2	後期	専任・博 (学術) 専任・博 (政策・メディア) 専任・博 (経営学)	◎各 西山	務 岡 口	洋 洋	子 子 浩		
	文化論分野	グローバル・メディア文化研究指導Ⅰ	研究 指導	2	前期	専任・博 (学術)	◎川 芝	崎 崎	賢 厚	一 士		
		グローバル・メディア文化研究指導Ⅱ	研究 指導	2	後期	専任・博 (学術)	◎川 芝	崎 崎	賢 厚	一 士		
		グローバル・メディア文化研究指導Ⅲ	研究 指導	2	前期	専任・博 (学術)	◎川 芝	崎 崎	賢 厚	一 士		
		グローバル・メディア文化研究指導Ⅳ	研究 指導	2	後期	専任・博 (学術)	◎川 芝	崎 崎	賢 厚	一 士		
		グローバル・メディア文化研究指導Ⅴ	研究 指導	2	前期	専任・博 (学術)	◎川 芝	崎 崎	賢 厚	一 士		
		グローバル・メディア文化研究指導Ⅵ	研究 指導	2	後期	専任・博 (学術)	◎川 芝	崎 崎	賢 厚	一 士		
	情報論分野	グローバル・メディア情報研究指導Ⅰ	研究 指導	2	前期	専任・博 (情報) 専任・博 (工学)	◎石 吉	川 田	憲 尚	洋 史		
		グローバル・メディア情報研究指導Ⅱ	研究 指導	2	後期	専任・博 (情報) 専任・博 (工学)	◎石 吉	川 田	憲 尚	洋 史		
		グローバル・メディア情報研究指導Ⅲ	研究 指導	2	前期	専任・博 (情報) 専任・博 (工学)	◎石 吉	川 田	憲 尚	洋 史		
		グローバル・メディア情報研究指導Ⅳ	研究 指導	2	後期	専任・博 (情報) 専任・博 (工学)	◎石 吉	川 田	憲 尚	洋 史		
		グローバル・メディア情報研究指導Ⅴ	研究 指導	2	前期	専任・博 (情報) 専任・博 (工学)	◎石 吉	川 田	憲 尚	洋 史		
		グローバル・メディア情報研究指導Ⅵ	研究 指導	2	後期	専任・博 (情報) 専任・博 (工学)	◎石 吉	川 田	憲 尚	洋 史		

注：◎印は主担当

● 授業科目の概要

■ グローバル・マネジメント論特殊研究【講義】

各務 洋子

市場における企業の競争優位を希求する競争戦略論を軸とした企業研究と、個別組織の継続維持成長を求める資源依存分析を軸とした企業内部分析アプローチを両軸として、企業のグローバル化に伴う課題を多角的に研究する。具体的には、メディア技術の革新との調整、人材のダイバーシティの検討、対象市場の拡大によるターゲティングの課題、組織作り、人作りのマネジメントプロセスの研究等、企業の経営資源における様々な独創的な戦略的マネジメントを考察する。

■ グローバル・メディア制度論特殊研究【講義】

西岡 洋子

各国およびグローバルレベルで複雑化が進んでいるメディア制度の分析に向けて、まずは、比較制度分析に焦点をあてつつ制度分析における各アプローチについて理解を深める。さらに最新の研究動向に目を配りつつ様々な対象に学際的に展開可能な制度分析の実際および重要な研究課題を学び、分析対象にあわせて柔軟で独創的な分析枠組みのデザイン、新規性の高い学際的な分析手法の構築能力を涵養する。

■ メディア・ファイナンス論特殊研究【講義】

山口 浩

企業の「血液」としてあらゆる企業活動における価値の流れを裏打ちする「マネー」はその本質において情報であり、したがって近年の情報技術の発達による恩恵をフルに受けるとともに、リスクの増大にも直面することとなる。ファイナンス理論への理解の上に立ち、それを他の領域の知見とを融合するアプローチにより、インターネットが経済活動の広範な範囲をカバーし、高度な機能を備えた情報端末が個人を含む隅々にまで行き渡ったこの社会において、ファイナンスが企業活動をどのように制約し、またどのようにその可能性を広げていくのか考察し、さらに、グローバルにインターネットを通じてメディアが活用される社会において適切な独創的かつ新規性の高いファイナンスに関する分析方法、モデル設計、実施方式、評価方法を構築する。

■ グローバル文化論特殊研究【講義】

川崎 賢一

アングロサクソン文化とそれ以外の文化システムと対比しながら、歴史的展開と現状における競争状況、それから、それらを取り巻く、ICT環境のトランスフォーメーションとの関連で、文化的グローバリゼーションのモデルを概観する。特に、アメリカ文化の動向を中心として押さえつつ、ヨーロッパ文化・東アジア文化・東南アジア文化との、データを踏まえた比較モデルを説明し、メディア学との関係を考察しながら、実際にモデル化作業を体験してもらう予定である。また、授業については、主に英語の文献を用いる予定である。

■ グローバル・リレーションズ論特殊研究【講義】

芝崎 厚士

単なる国家間関係を含む、地球規模の国境を越えた様々な主体間の関係として「グローバル・リレーションズ」を総体としてとらえるための歴史的背景、理論的概念枠組を習得した上で現実の世界の諸課題への取り組みを考究する。関連する文献の輪読とプレゼンテーション、ディスカッションを組み合わせた授業を行う。

■ モバイル・ユビキタス・コンピューティング論特殊研究【講義】

石川 憲洋

分散処理技術、コンピュータ・ネットワーク技術、インターネット技術に関する基本知識を前提とし、(1)遅延耐性ネットワーク (DTN)、ネットワーク仮想化 (SDN/NFV)、コンテンツ指向ネットワーク (CON)などの次世代インターネット技術、(2)次世代移動体通信/近距離通信技術 (5G、次世代無線LANの動向など)、車・車間アドホックネットワーク技術 (VANET)などの次世代モバイルコンピューティング技術、(3)イベント駆動型アーキテクチャ、IoT、M2Mなどの次世代ユビキタスコンピューティング技術について、幅広い視点から習得する。さらに、当該分野のトップレベルの国際会議を講読することにより、最新研究動向を理解する。さらに、これらの技術を組み合わせて実現されるスマートハウス、スマートカー、スマートシティなどの研究開発を事例を含めて紹介することにより、技術に基づくサービス開発について学ぶ

■ 次世代メディア・コンテンツ構成法特殊研究【講義】

吉田 尚史

多様化する次世代情報メディアを活用し、データベース技術の方法論を応用してグローバルに情報発信を行うために必要な、コンテンツ構成の方法論について理解を深める。具体的には、修士課程までに得たメディア情報に関する知識と技術を高度化し、次世代メディア・コンテンツ構成方法について、実習を伴う実践的な講義を行う。さらに、博士論文作成を目的とした、次世代メディア・コンテンツを活用するプレゼンテーション能力や情報発信能力の向上も図る。社会人出身者には、実務経験を裏打ちする理論的体系能力、論文作成能力取得に力点を置く。修士課程出身者には、高度で専門的な研究・開発能力の習得に加えて、世界に通用する新サービスに必須となる英語でのプレゼンテーションおよびコミュニケーション能力修得に力点を置く。

■ グローバル・メディア産業研究指導Ⅰ【研究指導】

各務 洋子／西岡 洋子／山口 浩

1年次生を対象とした産業論分野における論文指導を行う。1年次前期は研究の方向性を定めるため、6月所定の期日までに研究テーマと研究計画を記した研究計画書を提出し、研究領域における専門的な知識と同時に研究者としての視野を広げることを目標とする。同時に、研究テーマに関連する文献(先行研究)のサーベイを進め、学術論文を作成する基礎を身に付ける。領域としては、新しいメディア産業の新しい動向と、それが既存のメディア産業に与える影響、および企業経営にとっての重要性など実践的な研究課題を設定する。学会等にも参加し、メディアにかかわる先端的課題を探究する。社会人学生には、実務経験を裏付ける理論的背景を、修士課程出身学生には、理論と実践を両立させる高度専門的職業の資質を、論文作成指導を通じて与える。英文学術論文等のサーベイを通じて、基本的な英文読解能力を育成する。

■ グローバル・メディア産業研究指導Ⅱ【研究指導】

各務 洋子／西岡 洋子／山口 浩

1年次生を対象とした産業論分野における論文指導を行う。1年次後期は前期に作成した研究計画書で掲げた目標に向けて、年度末の研究報告会での報告を目標として、学位論文の主たる部分となるべき内容を指導する。前期に引き続き、研究テーマに即した関連学術論文の抄読、輪読を継続する。同時に、学術雑誌への投稿、学会での発表など、研究内容の進捗に即した報告ができるよう指導する。年度末には、「1年次研究報告書」ならびに「業績報告書」を作成する。社会人学生には、実務経験を裏付ける理論的背景が身に付いて来ているか、修士課程出身学生には、理論と実践を両立させる高度専門的職業の資質が身に付いて来ているか、1年次研究報告書および業績報告書を通じて確認する。英文学術雑誌等の投稿に向けた作成指導を通じて、基本的な英文読解・作成能力を育成する。

■ グローバル・メディア産業研究指導Ⅲ【研究指導】

各務 洋子／西岡 洋子／山口 浩

2年次生を対象とした産業論分野における論文指導を行う。2年次前期は対外的な学会発表の準備及び研究内容の深化を目指す。自らの研究テーマの対外的発表のため、テーマの詳細化と同時に幅広い視点からの検討を行う。本授業では、その準備のために、担当教員全員の前で発表、ディスカッションを積極的に取り入れ、研究内容を一層深める。領域としては引き続き、新しいメディア産業の新しい動向と、それが既存のメディア産業に与える影響、および企業経営にとっての重要性にかかわる実証的分析の指導を行う。これらのディスカッションを通じて、社会人学生には、実務経験を裏付ける理論的背景を、修士課程出身学生には、理論と実践の両立を涵養する。英文学術論文の抄読・学会発表準備等により、実践的な英文読解、英文作成能力を育成する。

■ グローバル・メディア産業研究指導Ⅳ【研究指導】

各務 洋子／西岡 洋子／山口 浩

2年次生を対象とした産業論分野における論文指導を行う。2年次後期は前期に作成した研究計画書で掲げた目標に向けて、9月の学期始めに「中間発表会」を実施し、さらに年度末の研究報告会で2年間の業績報告を目標とする。学位論文の基本的なフレームワークを作成し、学会発表、学術雑誌への投稿を通して自身の研究内容を深化させる。年度末には「2年次研究報告書」ならびに「業績報告書」を纏め、「研究報告会」を実施する。中間発表の準備と開催により、社会人学生には、実務経験を裏付ける理論的背景を、修士課程出身学生には、理論と実践の両立を身を持って体得させる。国際学会等での発表準備と発表により、実践的な英語のスピーキングとリスニングとディベート能力を育成する。

■ グローバル・メディア産業研究指導Ⅴ【研究指導】

各務 洋子／西岡 洋子／山口 浩

3年次生を対象とした産業論分野における論文指導を行う。3年次前期においては、これまで2年間の研究内容をもとにして、研究テーマの整理、収集した文献情報を検討し、研究の正当性、研究テーマの新規性、独自性等を考慮しながら学位論文の作成と同時に学術雑誌への投稿、関連学会での研究会発表を継続的に行うことを目標とする。具体的には前期末に、学位論文中間発表会を実施し、8月までには学位論文の構成部分となる論文を纏めあげ、学会において専門の研究者との批判や意見を取り込み、後期での学位論文完成という研究の集大成に向けた取り組みの前段階とすることを目標とする。これらの継続した指導と発表会により、社会人学生には実務経験を裏付ける理論的背景を、修士課程出身学生には理論と実践の両立を、それぞれ涵養する。国際学会や国際研究会等への参加により、実践的な英語能力(スピーキング、リスニング、ディベート等)を育成する。

■ グローバル・メディア産業研究指導Ⅵ【研究指導】

各務 洋子／西岡 洋子／山口 浩

3年次生を対象とした産業論分野における論文指導を行う。3年次後期においては、学位論文の作成に専念するように指導する。同時に、学位論文に関連した査読付き学術雑誌への投稿を行うことを目標とする。具体的には前期末に開催した学位論文中間発表会での評価、関連学会、研究会等での評価を取り入れ、学位論文完成という研究の集大成に向け論文を纏めあげることを目標とする。同時に、社会人学生には実務経験を裏付ける理論的背景が、修士課程出身学生には理論と実践を両立させる高度専門的職業の資質が、それぞれ身に付いたか確認する。

■ グローバル・メディア文化研究指導Ⅰ【研究指導】

川崎 賢一／芝崎 厚士

1年次生を対象とした文化論分野における論文指導を行う。日本発のイノベーションが国内市場志向から脱却しグローバルな展開を志向する際に必要不可欠な文化システム理解能力を高める教育研究を行う。そのために社会学、文化研究、国際関係論・グローバル関係論やコミュニケーション論関連の古典ならびに最新の研究論文を輪読するとともに、実証的研究の方法を指導する。実践的な研究課題を明らかにして、研究テーマを設定する。学会等にも参加し、研究計画を立案する。

■ グローバル・メディア文化研究指導Ⅱ【研究指導】

川崎 賢一／芝崎 厚士

1年次生を対象とした文化論分野における論文指導を行う。日本発のイノベーションが国内市場志向から脱却しグローバルな展開を志向する際に必要不可欠な文化システム理解能力を高める教育研究を行う。そのために社会学、文化研究、国際関係論・グローバル関係論やコミュニケーション論関連の古典ならびに最新の研究論文を輪読するとともに、実証的研究の方法を指導する。研究を進めるために必要な知識、技術の習得を進めながら、研究計画を具体化し、具体的研究計画を立案する。

■ グローバル・メディア文化研究指導Ⅲ【研究指導】

川崎 賢一／芝崎 厚士

2年次生を対象とした文化論分野における論文指導を行う。日本発のイノベーションが国内市場志向から脱却しグローバルな展開を志向する際に必要不可欠な文化システム理解能力を高める教育研究を行う。そのために社会学、文化研究、国際関係論・グローバル関係論やコミュニケーション論関連の古典ならびに最新の研究論文を輪読するとともに、実証的研究の方法を指導する。今期は主として対外的な学会発表の準備および研究内容の深化を行う。

■ グローバル・メディア文化研究指導Ⅳ【研究指導】

川崎 賢一／芝崎 厚士

2年次生を対象とした文化論分野における論文指導を行う。日本発のイノベーションが国内市場志向から脱却しグローバルな展開を志向する際に必要不可欠な文化システム理解能力を高める教育研究を行う。そのために社会学、文化研究、国際関係論・グローバル関係論やコミュニケーション論関連の古典ならびに最新の研究論文を輪読するとともに、実証的研究の方法を指導する。今期は主として対外的な学会発表を通じて研究内容の深化を行う。

■ グローバル・メディア文化研究指導Ⅴ【研究指導】

川崎 賢一／芝崎 厚士

3年次生を対象とした文化論分野における論文指導を行う。日本発のイノベーションが国内市場志向から脱却しグローバルな展開を志向する際に必要不可欠な文化システム理解能力を高める教育研究を行う。そのために社会学、文化研究、国際関係論・グローバル関係論やコミュニケーション論関連の古典ならびに最新の研究論文を輪読するとともに、実証的研究の方法を指導する。博士論文の完成を念頭に、博士論文の標題と概要の準備を行う。

■ グローバル・メディア文化研究指導Ⅵ【研究指導】

川崎 賢一／芝崎 厚士

3年次生を対象とした文化論分野における論文指導を行う。日本発のイノベーションが国内市場志向から脱却しグローバルな展開を志向する際に必要不可欠な文化システム理解能力を高める教育研究を行う。そのために社会学、文化研究、国際関係論・グローバル関係論やコミュニケーション論関連の古典ならびに最新の研究論文を輪読するとともに、実証的研究の方法を指導する。今期では博士論文を纏める。

■ グローバル・メディア情報研究指導Ⅰ【研究指導】

石川 憲洋／吉田 尚史

1年次生を対象とした情報論分野における論文指導を行う。実社会における学際的な課題に対して、デバイス、ネットワーク、クラウド、ソーシャルメディアなどを含む次世代の情報システム全般を対象として、どのようなメディアのイノベーションが解決につながるのか、実践的に探求する。そのため、試行錯誤によるフィードバックを元にした段階的、実践的アプローチを用いて研究を進める。研究を進めるために必要な知識、技術の習得を進める。その上で、実践的な研究課題を明らかにして、研究テーマを設定する。学会等にも参加し、研究計画を立案する。社会人出身の学生には、実務経験を裏付ける理論的背景を構成する研究計画とし、修士課程出身の学生には、理論的背景の上に高度な専門的職業を担当できるよう留意した研究計画とする。国際学会等での文献調査を通じて、実践的な英語能力を育成する。

■ グローバル・メディア情報研究指導Ⅱ【研究指導】

石川 憲洋／吉田 尚史

1年次生を対象とした情報論分野における論文指導を行う。実社会における学際的な課題に対して、デバイス、ネットワーク、クラウド、ソーシャルメディアなどを含む次世代の情報システム全般を対象として、どのようなメディアのイノベーションが解決につながるのか、実践的に探求する。研究を進めるために必要な知識、技術の習得を進めながら、研究計画を具体化し、具体的研究計画を立案する。社会人出身の学生には、実務経験を裏付ける理論的背景を構成する指導を行う。修士課程出身の学生には、理論的背景の上に高度な専門的職業を担当できるよう留意した指導を行う。国際会議および英文論文等での文献調査、および、英文添削を通じて、実践的な英語能力を育成する。

■ グローバル・メディア情報研究指導Ⅲ【研究指導】

石川 憲洋／吉田 尚史

2年次生を対象とした情報論分野における論文指導を行う。実社会における学際的な課題に対して、デバイス、ネットワーク、クラウド、ソーシャルメディアなどを含む次世代の情報システム全般を対象として、どのようなメディアのイノベーションが解決につながるのか、実践的に探求する。文献調査を1年次に引き続き行い、対外的な学会発表の準備および研究内容の深化を行う。社会人出身の学生には、実務経験を裏付ける理論的背景と英語によるテクニカルライティングを身に付けるよう訓練する。修士課程出身の学生には、理論的背景の上に高度な専門的職業を担当できるよう、理論を実践する点を訓練する。英文文献の学習、国際学会や英文論文の調査、および、英文論文作成とその添削を通じて、実践的な英語能力を育成する。

■ グローバル・メディア情報研究指導Ⅳ【研究指導】

石川 憲洋／吉田 尚史

2年次生を対象とした情報論分野における論文指導を行う。実社会における学際的な課題に対して、デバイス、ネットワーク、クラウド、ソーシャルメディアなどを含む次世代の情報システム全般を対象として、どのようなメディアのイノベーションが解決につながるのか、実践的に探求する。対外的な学会発表を通じて研究内容の深化を行う。社会人出身の学生には、実務経験を裏付ける理論的背景を構成することに留意する。修士課程出身の学生には、理論的背景の上に高度な専門的職業を担当できるよう留意する。国際学会等での発表準備と発表を通じて、実践的な英語能力を育成する。

■ グローバル・メディア情報研究指導Ⅴ【研究指導】

石川 憲洋／吉田 尚史

3年次生を対象とした情報論分野における論文指導を行う。実社会における学際的な課題に対して、デバイス、ネットワーク、クラウド、ソーシャルメディアなどを含む次世代の情報システム全般を対象として、どのようなメディアのイノベーションが解決につながるのか、実践的に探求する。博士論文の完成を念頭に、博士論文の標題と概要の準備を行う。社会人出身の学生には、理論的背景が強化されたか確認しながら進める。修士課程出身の学生には、理論的背景の上に高度な専門的職業を担当できる能力が身についているか、確認しながら指導する。国際会議論文や英文の技術論文の調査、英文の添削、および、国際会議等での発表準備と発表を通じて、実践的な英語能力を育成する。

■ グローバル・メディア情報研究指導Ⅵ【研究指導】

石川 憲洋／吉田 尚史

3年次生を対象とした情報論分野における論文指導を行う。実社会における学際的な課題に対して、デバイス、ネットワーク、クラウド、ソーシャルメディアなどを含む次世代の情報システム全般を対象として、どのようなメディアのイノベーションが解決につながるのか、実践的に探求する。今期では博士論文を纏める。社会人出身の学生には、理論的構築能力が備わったか確認する。修士課程出身の学生には、理論的背景の上に高度な専門的職業を担当できる能力が身についたか、確認する。国際会議等での発表準備と発表、および、公聴会での英語での発表等を通じて、発表能力・ディスカッション能力を育成する。

第一章

第二章

仏教

国文

英米文

地理

歴史

社会

心理

経済

商

公法

私法

経営

診療放射線

グローバルメディア

第四章